



\* 0003371000 \*

0003371-000

631-36

世界審判の岐路に立つ日本

尾崎行雄・著

千倉書房

昭和7

ABA

631

36

尾崎行雄著

世界審判の

岐路に立つ日本

東京 千倉書房版

102

岐路に立つ日本

世界の審判の

尾崎行雄著

東京  
千倉書房版



## 序

私は曾て、拙著「幕末史の再演」中に次の如く述べた。

「……何處の人でも同じことでありませうが、人は其の國の現在の眞の有様を知りたい、同時に亦將來如何になるかといふことも心得たいといふのが、人情の自然であります。我同胞も矢張り同じ考を有つて居ると思ひます。然るに實は現在ほど知り難いものはない。未來も知り難いが、ひよつとしたら、未來よりも現在の方が知り難いかも知れませんが、國の現在を知ることは、自分の

顔の醜美を知ること、同じであつて、他人の顔は大抵分るが、自分の顔は朝夕鏡をみて居ても分らぬ。自惚鏡を見る人は、大變好く見る、随分粗末な顔でも、大抵買被つて、真相を知らぬのが、人間の常である。女でも男でも、他人の顔は宜く知つて居るが、自分の顔に付ては、心得違ひをして居るものが多い。思ひの外の醜男が、大そう好い顔のつもりで、自惚れて威張つて居るのに數々出會ふ事があります。

それと同じく、國といふものも、現在ほど分らぬものはない。過去は歴史で分ります、將來も稍々分る。唯々一番困るのは、現在であつて、詰り、廬山の中に在る者は、廬山の面目を知らず、

といふことに歸着するのであります。其處で、如何にしたならば、現在の日本が分るかといふことに就て、私も大分苦心しました。現在を正確に知らざる以上は、政府に在つても、民間に在つても、其施爲する所が、正鵠を得る譯にいかぬ。自惚れてもいかぬが、現在よりも下に見てもいかぬ。現在を正確に見て、他國との關係を知る、即ち、彼を知り己を知るは、百戰百勝の根本である……」

此度親しく歐米の地に遊んで、彼等列強が、如何に死生の巷に喘ぎつゝ、あるかを見るに及んで、感更に新なるものあり、茲に一文を草して、今や世界審判の岐路に立つ、我同胞諸賢の省察に資する事

とした。

昭和七年九月

英京ロンドンにて

尾崎行雄

## 目次

各國通じて未曾有の經濟難	一
(一) 列國の困窮状態	一
(二) 水練を知らない溺者のもがき	四
(三) 政治的不安の増加	六
第二の世界大戰回避に焦る	八
(四) 前回は君主制の破滅、次回は國家の滅亡	八

(五) 活きんと欲して死路を辿る事實 ..... 九

(六) 活きんと欲して死路を辿る原因 ..... 一〇

(A) 民衆主義全盛の結果であらうか ..... 一一

(B) 列國みな私利私慾に捉はれるためであらうか ..... 一二

(C) 列國の政治家が時代錯誤に陥つてゐるためであるまいか ..... 一五

時代後れの狂夢から醒めよ ..... 一六

(七) 世界組織進化の一端 ..... 一六

(A) 無機物同様の世界 ..... 一九

(B) 植物程度の有機體となつた世界 ..... 二二

(C) 動物程度の有機體となつた世界 ..... 三三

(D) 現在の世界は人類程度の有機體 ..... 三三

(八) 列國政治家の迷夢覺醒 ..... 三三

(九) 覺醒の程度如何 ..... 三九

(一〇) 覺醒し難い原因即ち世界難の病源 ..... 四二

(A) 民族主義の消長 ..... 四三

(B) 民族主義と國際主義の調和 ..... 四四

(C) 民族主義迷執の結果 ..... 四七

戦争により自ら惨禍を招くは愚骨頂 ..... 五〇

(一一) 戦争そのもの大變化 ..... 五〇

戦争の空中移轉 ..... 五一

(一二) 戦争の結果國家及び人類の滅亡 ..... 五五

(一三) 人類は元來馬鹿げたもの、その遺傳も悪い……………五七  
(一四) 安全を軍備のみに求むる事の誤謬……………五九

新時代に善處すべき新愛國心……………六三

(一五) 愛國心の濫用……………六三

(一六) 愛國心の由來とその利弊……………六五

(一七) 列國の動靜一斑……………六七

軍縮に必要な國際裁判條約……………六九

(一八) 軍縮問題の前途……………七六

(一九) 文化の進歩と國際裁判……………八〇

岐路に立つ日本の使命……………八四

(二〇) 小なる國際聯盟……………八四

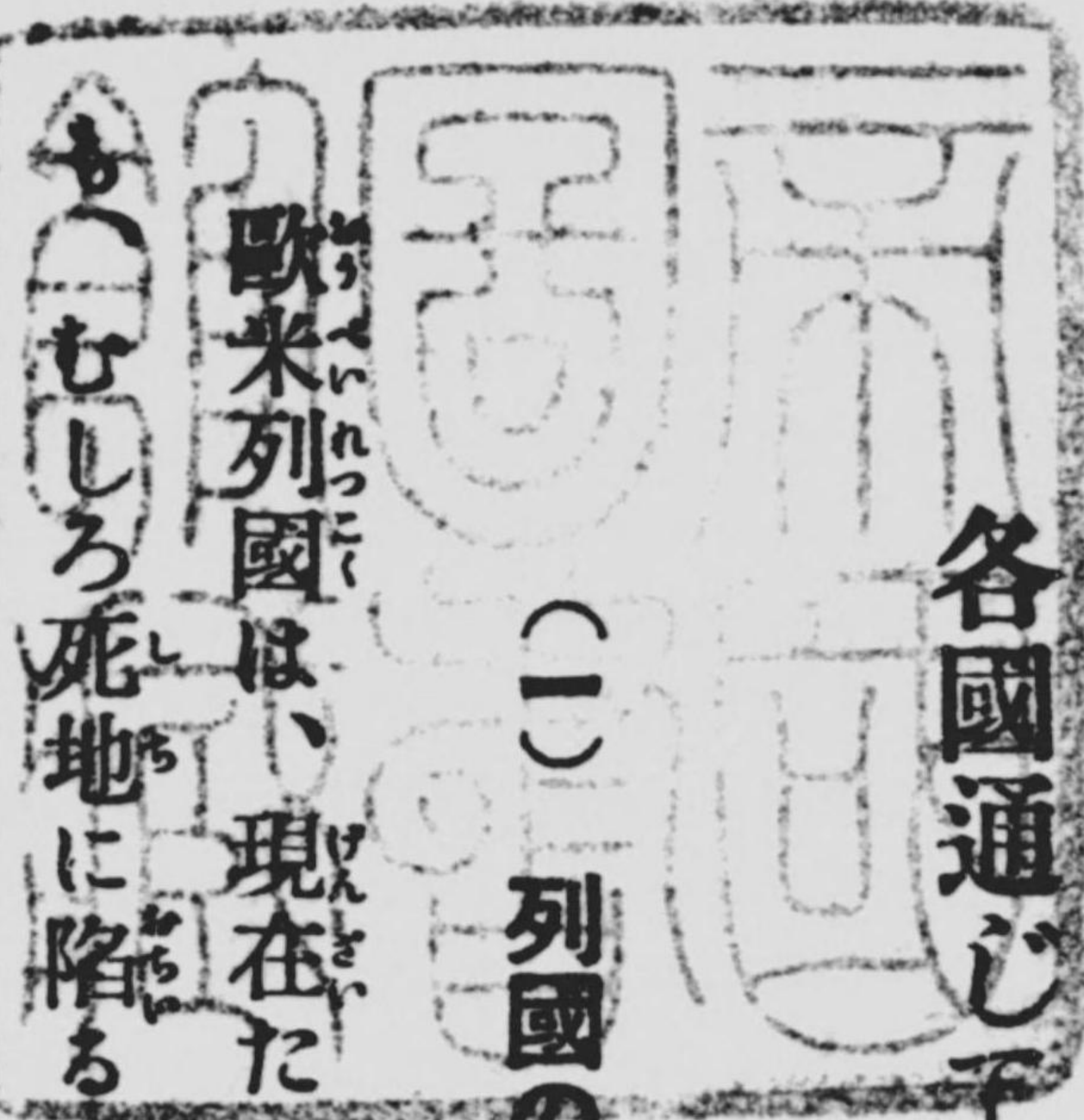
(二一) 強大國民と弱小國民の優劣……………八七

(二二) 物質及人類移動の自由……………九一



各國通じて未曾有の經濟難

(一) 列國の困窮狀態



歐米列國は、現在たゞ今死活の岐路に立つてゐる——といふより  
も、むしろ死地に陥るべき道をまつしぐらに進行してゐる——とい  
ふ方が適切なやうだ。戦時の貸金だけでも約二百億圓（金貨、以下同  
じ）におよび、その上に約八十億圓の正貨を貯藏してゐるところの  
米國ですら、その失業者は、一千萬人を超え、中央政府の財政は二

二  
十億圓前後の不足を生じ、立派な會社の株券で、額面價格の三分の一以下に下落したものが少くない。中には十分の一以下に下落したものもある。各州において、極力その上京を抑止したにも拘らず二萬の在郷軍人は、ワシントン市に集合し、議會に向つて、賞與金四十億圓の下附を強請してゐる。一步を誤れば、修羅場を現出せんも、はかられざる情勢が見える。

世界第一の富裕國——僅か二年前までは、不景氣知らず、否、好景氣の絶頂に狂舞してゐた米國ですら、この通りである。ましてや世界戦争のために、莫大な人と金とを失つた上、なほ到底拂ひ切れないほどの債務を負つてゐる歐洲列國が、さらに一層困窮するのは

少しも怪しむに足らない次第であらう。

特に全世界を向ふに廻して、四年間悪戦苦闘した末、遂に六百六十億圓の賠償金を支拂ふべく強請されたドイツの困窮状態は、説明するまでもなく、讀者の想像し得るところであらう。

かくて歐米列國は、大小富貧の別なく、いづれも前古未曾有の經濟的困難に陥り年豊かなれども餓殍道途に充滿する状態となつた。衣食足らざるがために、飢寒に號泣するものの多いのは、怪しむに足らないが、現在のごとく衣食あまりあつて、なほ餓死凍斃するものが多いのは、實もつて不可思議の至りである。この不可思議なる困窮状態より免れんと欲して、列國共に智謀のあらんかぎりを盡く

してはゐるが、努力すればするほど經濟狀態は、益々險惡に赴き、思想狀態も、また従つていよいよ險惡に赴いて來た。

四

(二) 水練を知らない溺者のもがき

その狀態は、恰も水練の心得のない者が、海に落ちた時と同様で、もがけば、もがくほど、溺死を招くのである。もがかずには、ジツとしてゐれば、人體は自然に浮き上つて助かるやうに、造物主が、作つて置いてくれたのだが、さうとは知りながら、なか／＼さうすることは出来にくいものと見える。全世界の政治經濟家は、不幸にして、水練を知らない溺者の煩悶を繼續してゐる。早くその過誤を悟

つてこれを改めざる限り、列國みないづれも溺者の災厄を免れぬであらう。

世界無双の富都と聞えたるロンドンや、ニューヨークですら、満目蕭條、全都到る處として、貸家札と賣家札とを見ざるはなく、乞食物貰ひの多いこと、ただ／＼驚嘆するのほかはない。米國第二の大都會たるシカゴ市の如きは、すでに破産に瀕し、前二ヶ月間貨銀の支拂ひが出来なかつたため、二千四百名の市街掃除人足が、同盟罷業に及び、不潔物堆積のため、悪疫が流行しさうだといつて騒いでゐる。該市の小學教員は既に六ヶ月以上も給料の支拂を受けず、その他の市吏員及び雇員も大抵數ヶ月間給料を支拂はれずにある。

五

(三) 政治的不安の増加

今春の總選舉において、アイルランドでは、前年の謀叛黨の首魁にして、死刑囚たりしドヴェラ氏が、勝利を得て政權を掌握し、英國に向つて公然叛旗を翻へしてゐる。結局どうなることか、何人も豫測することは出来ない。

ドイツでは、素性の分らぬ——いや分つてはゐるが、身分も経歴も、説くべき何ものもないヒトラ氏の仲間が、選舉ごとに急激異常の増加を來し、最近の總選舉には、さらにその勢力を増加すべき形勢であつて、近き將來において政權を掌握しさうにも見える。しか

して現在その主張するところはドイツは勿論、歐洲全體を大混亂に陥しいるべき事項である。すべて破壊的主張であつて、建設的政策は一つもない。さなきだに列國みな數百萬の失業者を有し、やゝもすれば内亂をも生じ兼ねまじき形勢あるに、かて、加へて、戦亂が歐洲の中原に勃發するが如きことあらば、世界の前途は、想像するだに戦慄にあたひする。

## 第二の世界大戦回避に焦る

### (四) 前回は君主制の破滅

#### 次回は國家の滅亡

前回の世界戦争においてすら、八大強國の内、獨、墺、露の帝室はいづれも滅亡し、イタリーはムツソリーニの獨裁政治となり、嚴然として君主國の舊態を維持してゐるものは、たゞ日、英兩國だけになつた。のみならず全世界は今なほ戦争の跡始末がつかずして前述の如き困苦をなめてをり、しかも將來益々困苦の増加すべき形勢

が見える。この時にあたつて第二の世界戦争!!

前回の世界戦争では、多くの帝室が、滅亡したが、次回の世界戦争では、多くの國家が滅亡するであらう。文明の没落! 人類の滅亡! そんな事態が、多分次の世界戦争の結果であらう。

### (五) 活きんと欲して死路を辿る事實

國家および人類の滅亡! 文明の没落! 聞くだに怖ろしい。世界廣しと雖も、白痴か癡狂者のほかは一人もこれを希望するものはない。なからう。萬人みな均しくこれを回避したいと願つてゐるに相違ない。

しかるに、全世界のいはゆる大人物なるものが大戦争を回避せんと欲して、盡力すればするほど、天下の形勢はますます、險惡に赴き、戦亂の機運が、いよ／＼増大するのは何ゆるだらう。再び游泳術を知らない溺者のことを回想せざるを得ない。

簡単に説明すれば、彼等は活きる道を知らないから、活きんと欲して、却つて死路を辿るのである。

議論は暫くおき、今讀者とともに、全世界の大政治家が、世界戦争中およびその以後において、主張し、かつ施爲した事實の一端を點檢しよう。

第一に、彼等は、戦争を廢絶するための戦争だと誇言した。しか

るに戦後の國際關係はますます、險惡に赴き、戦争は、たゞに廢絶されさうに見えないのみか、却つていつ何時勃發するやもはかり難い形勢を招致した。

第二に、彼等は民衆主義のために安全な世界を造るための戦争だといつた。しかるに、戦後の歐米列國は、こと／＼くみな獨裁主義に轉向した。露、伊、獨、墺、佛等は申すにおよばず、民衆主義の本家本元たる英米兩國すら、ある程度まで、行政官に與ふるに、獨裁權をもつてするに至つた。民衆主義のためには、極めて不安な世界が現出した。

第三に、彼等は、民族自決を高唱して、國民主義を獎勵した。し

かるに、今や世界列國は、國際主義と調和せざる偏狹なる國民主義に惱まされ抜いてゐる。國民主義は、やゝもすれば排他的私利私慾主義に墜落し易い性質を有してゐる。現在の世界的經濟難および政治難は、この排他的私利私慾心に基因するものが多い。

第四に、彼等は、戰敗國を壓抑して、出来るだけ、多額の賠償金を支拂はしめるのが、戰勝國の利益であり、また將來の平和の保障であると考へ、その通りに實行した。しかるに、少くとも經濟的には、すでに人類程度の有機體に進化した所の今日の世界においては、獨塊の苦痛は、直ちに歐米全體の苦痛となり、延いては、萬里の外なる日本にまで、波及するに至つた。

しかのみならず、賠償金を支拂ふといつても、獨塊には、これを支拂ふべき金貨がない。さりとて物品で支拂はせれば、戰勝國においてはこれまでその物品製造に従事してゐたものは、忽ち失業者となつて飢餓に陥る。無償で、物品を渡す方の國も困るが代價を拂はずに、これを受取る方の國も困る。結局實行し得べからざる空想をしかつめらしく、條約文に特筆大書したにすぎなかつた。

第五に、彼等は、戰罪即ち戰爭開始の全責任は、ドイツにありとなし、その首魁たるカイゼルを處刑すべしと主張した。當時の英國總理大臣ロイド・ジョージ氏が、パリより歸り、「カイゼルを捕へ來つて、ロンドンで裁判に附する見込みである旨」を報告した時に、

私は、偶々下院の傍聴席にゐたが、満場われるばかりの大喝采であつた。今日となつては、思ひ出すだに抱腹絶倒のいたりである。如何なる大人物でも、苟くも人間とある以上は、時あつてこの程度までは、發作的に暫時發狂し得るものであると思はれる。

今回のローザンヌ會議では、いよ／＼賠償金を廢止し「歐洲全體の復興に協力する」といふ名義において、ドイツは、十五億圓の債券を發行することになつた。

これは、列國がドイツは、世界戦争の責任者即ち首謀者ではなかつたことを公認した手はじめである。やがて世界戦争に關するドイツの責任全部を解除し、その根本主義において、漸次平和條約を改

正することになるだらう。

第六に、戰勝國の大政治家大經濟家は、第四項の事實に遭着して、豁然大悟し、獨塊を苦めることの代りに、これを援助して一日も早く復活させることに、その方針を變改した。右方針轉換の結果として、英米兩國が主として獨塊を援助し、しかしてその貸與した金額は、ドイツが支拂つたところの賠償金を遠く超過するに至つた。つまりドイツは自分の金は、一文も使はずにすべて以前の敵國から借入れた金を以て、賠償金を支拂ひなほ巨額の餘剰を生じたのである。現在のドイツには「賠償金は勿論のこと、この借金すら支拂はないぞ」と豪語するものがある。ヒトラ黨が、政權を得たなら、支拂停



止を斷行するかも知れない。昔の人に、こんなことを話して聞かせたなら、數千年以前の神話とでも想ふだらうが、神話ではなく現在たゞ今世界の中原に現出してゐる事實である。この一事を見ても、世界の實質が、如何に變化して來たかが、理解されるだらう。この理解なしに、國際關係を論ずるのは、盲者が色を説く類である。しかし、ヴェルサイユの平和會議に參集した全世界の大政治家は、大抵盲目漢であつた。ゆるに色彩の評價が、全く間違つてゐた。まだ面白いのは、敵國援助のために、金を貸し過ぎたために、自國の大難を招き、あわて、金貨本位制度を停止して、僅かに一時を彌縫した英國の所業である。米國とても、貸し過ぎたため、可なり困つて

ゐるやうだ。

第七に、かれらが、こんな悲喜劇を繰返してゐる間に、自他の經濟狀態は、益々險惡に赴き、列國いづれも金貨の缺乏と、歲計上の不足を生じた。これを救はんと欲して、かれらが開始したのが、關稅戰爭である。

その目的は、關稅によつて、幾何か歲計の不足を填補すると同時に、輸入を減少し、輸出を増加するに在つたのだ。自國は少く買つて、他國には多く買はせよう！ そんな不思議なことが人間世界で出来るか、出来ないか少し考へて見たらよからう。

貿易の原則は、物々交換であつて、金貨はその差額を決済する補

助物に過ぎない。他國の物品を多く受取るから、他國もまた、自國の物品を多く受入れることが出来るのである。列國みな關稅障壁を築いて、輸入を防止すれば、いづれの國への輸出も、悉く減少するではないか。

買はない工夫は、即ち賣らない工夫となるのである。しかるに、世にも名高い自由貿易國たる英國までもが、關稅障壁を築いて、輸入を減少せんともがいてゐる。他に特別の原因がない以上は輸出もまた従つて減少するに相違ない。現に關稅戰爭開始以來、列國の輸出は概して大いに減少してゐる。

かくて、世界の不景氣は、益々増大し、失業者は、愈々増加し、

禍亂の機運は、日毎に切迫する。古人は「天の災は、なほ避くべし。自ら招く禍は、避くべからず」といつてゐる。

第八に、國際的戰亂を豫防せんがため、列國は汲々として軍備を整へ、歲計の不足や、失業者の救済に困苦するにも拘らず、なほ毎年無慮百億圓の軍事費を支拂つてゐる。前年の世界戰爭は、主として軍備の競争より起つたことを忘れたのか、はた初めより、知らなかつたのか、實以て不可思議千萬だ。

もしも戰爭を目的とするところの軍備によつて、戰爭を豫防することが出来るなら、油を注いで、火を消すことも出来るはずだ。揮發油ほど、火災を起し易いものはなく、軍備ほど戰亂を挑發し易い

ものはない。見よ、米國とカナダの國境、二千英里の間には、一兵のこれを守備するものなく、一壘のこれを防衛するものがない。従つて攻守衝突のおそれがなく、兩國人民みなその堵に安んじてゐる。

(六) 活きんと欲して死路を辿る原因

今日の世界は、多士濟々、人物が、多すぎて、かれらの間に多數の失業者を生ずるほどの盛況だ、しかるに、右に列擧した事實だけを見ても、世界的大政治家大經濟家の實行したところは、その目的と正反對の結果を生じてゐるではないか。

遠き既往は、問はず、近く一千九百十四年の世界戦争勃發以來、十八、九年間に、かれらが考慮し、施設したところの事物を見るに、ほとんど一としてその目的を達したものはない。誰が何と辯護しても、列國の不安および困窮状態が、かれらの過誤、失策、無見識を證明してゐる。しかもそれが、一國一洲に止らず、廣く全世界を包含する以上は、あらゆる智者、識者、英雄、豪傑を盲目たらしむるところの普遍的大原因がなければならぬ。それは何であらう？

(A) 民衆主義全盛の結果であらうか

ある者は、しかりと答へる。その説に曰く「いづれの國にも、智者は少く、愚者は多い。民衆多數の意見によつて、事を決する以

上は、勢ひ衆愚の意見に従はざるを得ない。如何なる先見達識の大政治家と雖も、衆愚の賛成を得なければその意見を行ふことは出来ない。前段列擧の過誤失策は、大人物が衆愚の賛成を得んがために、多数者が平均點にまで、その意見を低下した結果である、云々。』

一理あるやうだが、未だ必ずしもさうではない。このごろの民衆は頗る従順で、よく大政治家の意見を賛成して、その志を遂げさせる。佛人が、ポアンカレを援けて、その財政および經濟政策を斷行せしめたるが如き、また英人が國民内閣に大多數の投票を入れて随意にその政見を實行させるが如きは、その例證だ。隨行者たる民衆よりも、その先達たる政治家の方に、却つて過誤失策の原因が多

いやうだ。

前に掲げた八種の事實は、いづれも大政治家が、ある限りの智恵をしぼつて首唱したものであつて、愚論愚策と知りつゝ、民衆と調和せんがために、ことさらに低下した意見ではない。

昨年米國大統領が、一年間戰債および賠償金の支拂停止を發議した時に、主としてこれに反對したのは、佛國の衆愚ではなく、却つてその上智であつた。苦心慘愴、遂にドイツをして、一旦その賠償金をバーゼルの國際銀行に拂ひ込ませ、該銀行をして直にこれをドイツに貸渡させるといふ珍案を立てたのは、衆愚でなくして、上智であつた。

今年も再び支拂ひ休止の問題が、ローザンヌに起つたが、一年たてば、三ツ子も四歳になる。さすがに佛國の大政治家も、今年はその如き愚案は、これを固執しなかつた。

(B) 列國みな私利私慾に捉はれるためであらうか

しかり。地理的や政治的には、今なほ國境が、存在するが、経済的には、歐米文明國の間には、すでに國境がなくなつてゐる。経済組織は、とくの昔に、列國を打つて、一丸となし、一個の有機體になしてしまつた。この新天地においては、共存共榮のほかに、経済的に活きる途はない。

しかるに、列國の先達たるべき政治家經濟家は、今なほ前世界の

舊思想舊感情にとらはれて、各々自國だけの私利私益を獲得せんと焦躁する。かれ等が働けば働く程、共同體たる世界の經濟状態が、悪化するのには、當然の次第である。

今や、列國の政治家も、二十年近くの間、失策に失策を重ねて、漸く目が覺めかけて來たやうだ。この間のローザンヌ會議においては、賠償金および戦債全部の帳消論が、はじめて實際問題として主張されるやうになつた。晚い哉、列國政治家の覺醒！かれ等は決して衆愚を咎める資格はもたない。

(C) 列國の政治家が時代錯誤に陥つて

あるためではあるまいか

曰く、しかり。大いにしかり。現在の世界組織の下においては、戦争によつて、何の得るところもない次第は、ノルマン・アンジエルの如きは、二十餘年以前において、すでにこれを論證してゐる。ピスマーク等の如きも、佛國に勝つて、アルサス、ローレンの二州を取り、また當時は、佛國をして再起する能はざらしむるために十分と、考へたほどの償金をも取つたが、その後未だ數年ならずして、その過誤を悟つた。かれはこれがため、ドイツ人を傲慢不遜ならしめたほかに、何の得るところもなかつたことを後悔してゐる。『貿易が、國旗に随伴した時代』は、とくの昔に、過去の一夢となつてしまつたのである。

しかるに列國の政治家は、この事實を理解し得ず、舊態依然たる頭腦をもつて、全然變化し盡したところの新世界に臨んでゐる。その言行がおよそ齟齬撞着して、かれらの希望とは正反對の結果を生じたのは、當然すぎるほど當然の次第であらう。

## 時代後れの狂夢から醒めよ

## (七) 世界組織進化の一端

蒸気機関の發明以來、世界組織が、政治、經濟、社交等あらゆる方面において一變したことは、世界の廣きも、一人としてこれを知らない者はなからう。

電信、電話、無線電信、自動車、飛行機、テレヴィジョン等の發明および流行以來、世界は、さらに大に變化した。しかるに世間に

は未だこの大變化を認識しない人が多い。また多少これを認識はするが、その政治的、社會的、經濟的言行をして、これに調和させることの出来ない人が多い。これは、帆船時代の思想を抱いて、汽船時代に處するよりも、さらに一層重大な時代錯誤である。

古昔に比ぶれば、今の世界は旅行、運搬の期間においては、百分の一、通話においては、古昔は絶対に出来なかつたものが、今日は萬里の外と自由に對談することが出来る。古人が文學的空想として唱道したところの四海兄弟、五洲一家といふが如き事態も、或意味においては、すでに實現してゐるのである。

## (A) 無機物同様の世界

古昔の野蠻時代においては、世界は廣大無邊であつたのみならず、東西南北何らの脈絡もなき一種の無機體であつた。この時代には、どこでも酋長政治が行はれた。同じ無機體的でも、道路が開け交通が便利になれば、世界は時間的に縮小され、従つて酋長配下の地域が、擴張されて封建政治となる。その後文化の進むに従つて、世界は益々縮小され、一國內に幾百の諸侯を包容し難いやうになれば、封建政治はさらに一變して國民政治となる。

一個もしくは幾個の民族が、一政府の下に統一されるやうになつても、交通機關がなほ幼稚で、列國を貫通する脈絡血液がなかつた間は、世界は全く石塊同様の無機物に過ぎなかつた。この時代におい

ては、一國の存亡盛衰は、他國に何らの影響をも與へないのみならず、他を亡ぼしてこれを併合すれば、敗者の損害は却つて勝者の利益となつたのだ。

### (B) 植物程度の有機體となつた世界

その後文化の進歩とともに、世界は益々縮小し、かつ列國互に通商貿易をするやうになつてから、石塊同様な世界は漸く進化して、その組織體の間において、互に多少の利害を感じる所の有機體となつた。しかし、また植物程度の有機體に過ぎなかつたから、他の盛衰興亡に關係なく、一國だけで、獨り繁昌することも出来た。否、他國を征服し、その人民を苦しめて、却つて自國の繁昌を招來すること



が出来た。恰も樹木において、左枝を剪れば右枝が榮え、左右兩枝共に剪れば、本幹が一層著しく發育すると同じやうなものであつた。中古列國互に攻伐して、矢響きの絶えなかつた頃の世界が、即ち植物程度の有機體であつたのだ。

(C) 動物程度の有機體となつた世界

しかるに文明の進歩は何時か知れない間に、右の如き世界列國に對して、これを貫通聯合するところの血脈、神經等を與へ、遂に完全なる動物的有機體に進化せしめた。それは、一は世界列國の時間的距離が、古昔の百分の一、乃至千分の一に減少し、その同じ割合に世界が縮小したからであり、二は國境を超越するところの文明の利器

が際限なく發明せられたからである。

同じ動物程度の有機體でもその進化なほ低度にして、豚程度の物であつた頃は、その身體の一部を傷つけても、傷つけられざる他の部分には、餘り多くの苦痛を與へず、時あつては股を割いて、腹を満たすことも出来た。

(D) 現在の世界は人類程度の有機體

しかし、ソレが進化發達してすでに人類程度の有機體となれば四肢百體いづれのところを毀傷しても苟くも神經の通ふところは全身の苦痛となる。現世の世界組織はすでに人類程度の有機體となつてゐる。左手を斬つて右手の利益を擧げることとは出来ない。股を割い

て、腹を満たすことも出来ない。いやでも應でも、共存共榮、全世界とともに盛衰興亡するよりほかに、行くべき道はなくなつてしまつた。

大戦争以前においても、列國の經濟組織は、すでに國境を超越し、五洲一體となつてゐたが、近來は、その進化が、いよゝゝ急速顯著であつた。その結果、ロンドン、ニューヨークの取引所における動靜は、直に東京の相場にも影響した。北米合衆國の如き大陸的國家——十分に自給自足し得る國家ですら、如何に富んでも、また如何に金貨を澤山貯藏しても、他國が皆不景氣に苦しむ際には、一國だけ獨り繁昌することは不可能になつた。

### (八) 列國政治家の迷夢覺醒

一昨年までは、米國人の大多數はこの道理と事實を知らなかつた。偶々これを説くものがあつてもそれを信じなかつた。しかるに經濟的暴風雨が、一朝俄然全米を振蕩するに至つて初めて孤立獨樂の迷夢より醒めた。昨年六月フーヴァ大統領が一年間のモラトリアムを發議したるが如き、また本年六月軍縮を戦債の相關問題(さうと言明はしないが)として提起したるが如き、みな迷夢覺醒の結果である。世界列國悉く時代後れの狂夢に襲はれてゐる間は、戦敗國民はとに角戦勝國民は、實に愉快なことであつた。



(イ) 多年その安全を脅かし來つたところのドイツに向つて徹底的打撃を與へた以上は今後枕を高くして安眠することが出来る。

(ロ) ドイツの貿易をも餘ほどの程度まで、戰勝國に奪取することが出来る。

(ハ) 領地を取り償金を取つたから向後は安樂に暮すことが出来る。

(ニ) 特に米國の如きは格外の高價を以て軍需品を列國に賣り、その拂ひ残りは悉く貸金となし、債務國一變して莫大な債權國となつたから、將來ながく、おながら元利を收得する國柄となつた。

(ホ) 敵國すでに破滅した以上は、軍備の如きも、大いにこれを減縮してそれだけ租税を減少することが出来る。

(ヘ) 敵味方の別なく世界列國は戰爭の慘禍に懲りて、將來は平和の道を行くであらう。

(ト) 黄金世界とまで行かずとも、これを動機として大いに改造進歩するであらう。

(チ) 暴力時代は去つて正義時代が來るであらう、等——等——等。

愉快な感想は、際限なく起つた。しかし、今日となつて見れば何れもみな一場の空夢に過ぎなかつた。國家大繁昌の大原因と思つたところの償金も、貸金も、狂夢より覺め、眼を拭つて熟視すれば却つて世界不景氣の最大原因であつた。これその帳消論が遂に政治家間の實際問題となつて現はれたゆゑである。かく目が覺めて見れ

ばたゞ一途に國家のためと思つて屍を戰場にさらしたと、それ自身が元來間違ひであつた。單純にドイツのみが悪いと考へて獨人の肉を食はんとしたがその後公けにされたところの列國の機密文書を見れば列國みな同罪で、いづれの國人も皆悉く爲政者のために欺かれてゐたのであつたことが明白になつた。

これ平和條約の改定論や破棄説が、敵味方双方より主張せられるほどの奇觀を呈してゐるゆゑである。又戰爭に反對して國賊視されたところのマクドナルド氏が、國民内閣の總理大臣に戴かれ、全世界崇敬の標的となつてゐるゆゑである。また市内各所に建設されたところの無名戦死者禮拜塔の撤去説さへ、公然主張せられるに

至つたゆゑである。變れば、變る、世態人情といふべし。

### (九) 覺醒の程度如何

その半面を見れば、列國政治家および民衆の覺醒は、その程度の大なること、實に驚くべきものがある。

(イ)列國は前には償金を取ることを利益と考へたが、今日は取らない方が利益だと考へるやうになつた。

(ロ)米國も、前には貸金を取ることを利益と考へたが、今日は取らない方が利益だと考へるものが大いに増加した。大統領フーヴァ氏の如きはまた明言はしないがたしかにその一人のやうだ。

前日は墨と考へたものを、今は雪と思ふやうになつた。同じ人間の頭脳でよくもこんなに変化することが出来たものだと言はせざるを得ざるほどの大變化大覺醒である。しかし他の半面を見ればその覺醒は未だ徹底してゐない。いや未だ全く覺醒しない事實もある。償金や戦債が不景氣の最大原因であることは、歐米の政治家も民衆も二十年近くの經驗により漸くこれを悟つた。故にその帳消論が實行家の實際問題となつた。しかし佛米兩國は無條件ではまだなかなかそれを承諾しさうに見えない。畢竟覺醒がなほ不足するためである。また戦債と、償金が、景氣回復の最大妨害であることをば悟つたが、この二つのものは、戦争の産兒——いやその正系の嫡子である

ることは、未だこれを悟らないやうだ。

一旦戦債や、償金を帳消しにしたところで、將來再び大戦争が起れば、現在以上の戦債も償金も必ず再び現出することを知らないやうだ。しかのみならず、前回の世界戦争は一千萬の死傷者を生じ、三千億圓の富力を滅殺した。これに比すれば、戦債や償金の如きは、その半額にも足らない小額である。しかるに列國の政治家經濟家はその小なるものについては大騒ぎをしてゐるが、その大にしてかつ根本原因たる戦争そのものについてはこれを絶滅しようとは努めない。否その努め方が足りない。いや、次回の戦争準備に毎年一百億圓を費してゐる。元來戦債や償金は戦争といふ大きな火元から起つ

た飛火に過ぎない。しかるに、飛火の一部分だけは消しか、つてゐるが、その火元には毎年一億圓づゝの揮發油を注いで大にこれを煽つてゐる。眞誠に覺醒した人間には、こんな前後矛盾彼此撞着の仕事が出来るはずがない。平氣でそれをやつてゐるのは、未だ眞誠に覺醒しない證據である。かれ等はまた半睡半醒。寢ぼけ眼で妄動してゐるのである。

### (一〇) 覺醒し難い原因則ち世界難の病源

右に述べ來つた理路と事實は小學生徒でも理解し得るほど簡單明瞭なものだ。世界的大人物ともいはれる者に、どうしてそれが分らないのだらう。單刀直入、直ちにその本源を暴露して見よう。曰く、

世界を風靡する民族主義！

#### (A) 民族主義の消長

十八世紀は勿論のこと十九世紀の中頃までは民族主義はなほ幼弱であつたのみならず、やゝもすれば純理主義のために壓倒され封建主義より一躍して世界主義に飛んで行きさうな傾向すら見えた。現にイタリー及び獨逸人民の如きは同一民族でありながら、四分五裂して互に相抗争してをつた。また當時の先覺者たりしルーソーは、いつた。『今日となつては最早佛人も、西人も、曼人もない。いや、英人すらもない。たゞ、歐洲人あるのみ。かれらはすべて同一の風

俗、習慣、趣味、感情をもつてゐる』と。またゴールドスミスはいつた。「全世界は一個の都市に過ぎないから偶然何町に住んでゐても、そんなことは予の頓着する所ではない」と。またレツシングはいつた。「國を愛することは如何に褒めていつても義侠的惡事に過ぎない、予はそんな物を持たないでも差支へない」と。またトマス・スペインは誇らかにいつた。「世界は予が國で、人類は予が同胞だ」と。

右は、僅かにその一端に過ぎないが、その當時における民族主義のなほ微力なりしことを徴するに足るであらう。しかるに、文化の進歩と共に、地域が縮小し、他の民族との交通が、いよゝ頻繁に

赴くに從つて、同族相よつて、他の民族に對抗するの必要が生じ、遂に民族主義の急激なる發達を來した。この風潮を利用して、同一民族を同一國旗の下に統一したのが、獨伊の政治家であつた。ビスマークやカヴール等がそのうちの重要人物であつた。

#### (B) 民族主義と國際主義の調和

世界進化のある段階に於ては、封建主義がかつて必要であつた如く、この民族主義も必要であり、かつ有利であつた。しかし現在の如く、全世界がすでに人類程度の一個の有機體となり、その利害痛痒が共通になつた以上は、民族割據は勢ひ往古の封建割據と同様の結果を生ぜざるを得ない。即ち封建主義が一變して、民族主義に進

化したのと、同じ道程をふんで、民族主義は一變して國際主義に變化せざるを得ない。その事の是非善悪は別として、いやしくも科學的文明を破壊せざる限りはいやでも應でも、さうならざるを得ない。その過程としては、先づ狹隘なる民族主義を擴張して、國際主義と調和させる必要がある。眞に國を愛するものは、その好むと好まざるとに拘らず、自國の隆昌を計るために、國際主義に歸向せざるを得ない。

その面積は全世界の四分の一を占め、その人口は三億五千萬人に及ぶところの英帝國でも、又大陸的國家にして物資極めて豊富なる米國でも、孤立獨往することは出来ない。世界列國と共に、手の如

く足の如く、提携扶持するより外に生きて行くべき道はない。況んやその他の小邦貧國においてをや。

### (C) 民族主義迷執の結果

列國人民は智愚賢不肖の別なく、未だ十分にこの明白なる事實を認識することが出来ない。何ごとについても世界本位に考へないで、ひたすら自國本位に考へる。故に軍備、戦債、償金等の諸問題の如く、その利害の共通なるべき事項に關してすら、列國各々意見を異にして一致共同することが出来ず、幾年経つても世界的病源を治療することが出来ない。畢竟自國本位に物を考へ他を害しおのれ獨り利益を得んと計るからである。



右手は左手を毀傷して、おのれ獨り益せんと欲し、腹は股を割いて食はんと欲するからである。そんなことをすれば、するほど、全世界はいよ／＼益々不安に赴き、かつ困弊する次第は、戦中及び戦後の實驗によつて、最も明白に證明されてゐるではないか。

國際主義と調和を缺くところの民族主義が、列國人民の思想感情を支配する限り、世界は到底救はれない。その到着點は、いはく、世界的破産！いはく、第二の世界戦争！！

一家の内に住むものは、自己を愛すると同時に、その家を愛さなければならぬ。もししからずして、父母兄弟夫妻みな自己本位に物を考へ、事を處すればその家は破滅せざるまでも、必ず衰微する。一

郷一村に住むもの、一市一國に住むもの、皆、より小なるものを愛すると同時に、より大なるものをまた愛さなければならぬ。

しかるに黨人は、やゝもすれば、より小なる政黨本位に物を考へてより大なる國家をその犠牲に供し、列國人民は、より小なる民族本位に物を考へて、より大なる世界を犠牲にせんとする。その狀恰も國家を離れては政黨なく、世界を離れては國家のないことを知らざるもののやうだ。この精神狀態こそ政治的に、經濟的に、また思想的に、二十世紀の世界を悩ますところの最大病源である。これを略言すれば、時代錯誤、または覺醒不足の四字に歸着する。

## 戦争により自ら惨禍を招くは愚の骨頂

### (一一) 戦争そのものの大變化

それはともあれ現在のやうな精神状態で進行すれば、近き将来において、第二の世界戦争を見るであらう。ドイツはすでに内亂状態に陥つてゐるが、ヒトラ派が政權を獲得すれば獨佛の衝突は到底免れ難いやうにも見える。現在における歐洲中原の形勢は一千九百十四年即ち世界戦争が勃發した當時よりも、さらに險惡だといふの

が、歐米識者間の通論だ。しかして何人もこれを回避または豫防すべき名案を持たないのみならず、毎年一百億圓の軍事費を使つて盛んに戦争歓迎の準備をと、のへてゐる。かれらは、歓迎をもつて、防止と考へるほどの錯誤に陥つてゐる。見よ、上下五千年の久しき、軍備をと、のへて、戦争を防止し得た例證は一つもないではないか。

### 戦争の空中移轉

現在では、まだ飛行機飛行船等を見て、歩兵戦の補充機關と見なしているものが多いが、次回の戦争においては、その主力は、空中に移轉するであらう。

(一)その速力が一時間四五十マイルに過ぎない汽車、自動車で敵國を衝くよりも、一時間二三百マイルの飛行機をもつて敵國の都會を襲撃する方が有効である。

(二)歩騎兵の前には、山や河や堡壘、鐵條網等の妨碍物があるが空中にはそんなものは一つもなく、進退攻防自由自在である。

(三)堡壘城塞の如きものは攻めずに捨て、おいても、都會を襲撃して、政府や參謀部や中央銀行その他の金融機關や軍需品製造所等を破壊し盡せば、それで勝利は得られるのである。

(四)堡壘や、城壁、塹壕等に立て籠つてゐる兵士を殺すよりも、都會に集中してゐる老若男女を盡殺する方が容易である。かつ一萬

の兵士を殺傷するだけの努力をもつて、數百萬の男女を殺傷することが出来る。

(五)死ぬるまでも戦ふべく訓練された將卒を殺傷するよりも、未だその訓練を経ない都會の男女老若を殺傷する方が、敵國人を恐怖落膽戦慄沮喪せしめる効力が多い。即ち早く戦勝の結果を収め易いのである。

素人目で一見しても力を空中に用ひる方が、これを海陸に用ひるよりも、右等の利益がある。ゆるに將來の戦争は、やがて、空中に移轉するものと考へてよからう。いふこと勿れ、非戦闘員を虐殺するのは残酷だと。戦争とは、人を殺し、物を壊す働きをいふのである。

つて、戦争は元來残酷そのものである。かつ男女老若の非戦闘員と雖も、軍資や軍需品を供給する以上立派な對敵者であるから、これを殺傷するに、何の不思議もない譯になる。

世には、毒液、毒ガス等を禁止し、都會襲撃を制止しようと、盡力するものもあるが、これは偽善もしくは空論にすぎない。いやしくも戦争を認許する以上は、その武器方法等を制限することは元來出来ない相談だ。これを用ひて確かな勝利を得る見込が立てば、如何なる武器でも方法でも用ひることになる。しかして敗北すれば如何なる正論善議も、敗者の悲鳴としか聞えないことになる。

### (二二) 戦争の結果國家及び人類の滅亡

歐洲列國の如く犬牙錯綜、僅々數時間にして、他國の國都に到達し得る土地において戰禍勃發せんか、開戦公布のラヂオ未だ終らざるうちに、敵國の飛行機はすでにその王宮もしくは政治堂を襲撃するであらう。飛行機の來襲は、飛行機をもつて、これを防禦するよりほか方法はないが、あの廣い空中を、しかも上下一萬尺の間を、或は高く、或は低く、自由自在に飛來飛去するところの敵機を發見し、防禦することは容易に出来ない。

故に將來の空中戦争においては、敵機を迎撃して自國の都會を防

衛することの代りに、一刻も早く進んで敵國の都會を攻撃することになるであらう。すなはち彼我共に攻撃を主とし、互に敵國都會爆破の遲速を競争するの戦術を取るであらう。列國飛行將校中には、この新戦術を研究してゐるものが多いやうだ。

その結果、敵味方相互の都會らしい都會は、開戦後數日を出でずして、多くは爆破されるだらう。全都會の住民は、男女老若の別なく、毒火、毒液、毒ガス、毒光線に包圍せられて死滅するだらう。かくて、國家および人類の破滅を招き、文明も、没落するよりほかはなからう。しかし歐米列國は、駭々乎として、この斷崖に向つて突進しつゝある。

### (一三) 人類は元來馬鹿げたもの

その遺傳も悪い

あまりといへば、馬鹿げすぎてるやうにも見えるが、人類は元來馬鹿げたものである。釋迦や、孔子や、耶穌などが出て、人類を善くもし、伶俐にもしようとして考へていろ／＼と苦心教導してから、二千年も経つたが、一向善くもならず、また伶俐にもならず、機械や科學は大に進歩したが、人類の精神状態、即ち思想感情は、これに伴つて進歩しない。全世界の廣さも、上下二、三千年間の久しきにわたつて、右の三人以上の人物は、まだ一人も出で來ない。畢竟

その本質が、悪いからだらう。

静かに考へて見れば、その遺傳も善くはないやうだ。遠き神代のことはいざ知らず、人類の歴史あつて以來四、五千年の事實をみるに遠き酋長時代より、最近の蕃族時代にいたるまで、かれ等の多數は、種々の美名の下に、詐欺窃盜強盗人殺等をなしたものである。義兵とか義戦とか、巧に種々の名義は製造するが、他人を殺してその財物國土を横奪するをもつて無上の名譽と心得來つたのである。臺灣の生蕃は、個人的首狩をもつて人生最大の義勇的事業と心得てゐるが、現在の歐米人中には國家的首狩、即ち戦争をもつて至高最大の義勇奉公事業と心得てゐるものが多い。例巧振つて、不戰條約など

を締結はするものの、これを實行しようとする誠意はどこにも見えない。いや、いはゆる文明國中には、日支兩國に武器を供給して戦争を煽動してゐるものすらある。『流石に、四、五千年間、殺人強盗を實行し來つた人類の後裔たるに恥ぢない』と評してよからう。

一面から見れば、こんな人類は滅亡してもあまり惜しくあるまい。また國家的首狩を無上の名譽事業と心得るが如き文明は没落してもさして悲しむべき次第ではなからう。現在の如き人類は、一旦滅亡して、アダム、イヴから再び出直す方が善いかも知れない。

(一四) 安全を軍備のみに求むる事の誤謬

いや悪くつても仕方がない。現在列國が進行してゐるところの道をたどればいや應なしにそこに到着する。しからば、かれらがいふところ、行ふところに、多少の理由があるかと思れば迷謬以外に何物もない。一二の事實を擧げてこれを證明しようか。

ドイツ帝國は、先に主として國家の安寧幸福を軍備に求めた。古今萬國中恐らくドイツ帝國ほど軍備の盛大にして、かつ整頓してゐた國はなからう。さうしてかれはどうなつたか。申すまでもなく、滅亡して、人民みな塗炭の苦しみに陥つてゐる。

英國はかつて『二國標準』と唱へて、世界最大海軍二ヶ國を合併したほどの海軍力を維持しなければその安全を保つことが出来ない

主張してゐた。多年大金を費して二ヶ國に當り得るだけの海軍力を維持してゐた。その後ドイツが英國を目ざして大に海軍を擴張するや、英國はいよゝゝその標準を増加することの代りに、却つてこれを『一ヶ國半標準』に低下した。しかもこれがため、英國の安全は少しも減少しなかつた。

また華府の軍縮會議においては、英國海軍側の人々は、極力『一ヶ國半標準』を主張したが、その説行はれずして、遂に米國と對等即ちさらに『一ヶ國標準』に低下した。しかも英國の安全は少しも減少しなかつた。或程度以上の軍備の大小は、感情的に、その國人を喜憂せしむる外、實際においては國家の安危に何らの關係もないら

しい。たゞにしかるのみならず、過大の軍備を有する時は、その財力を疲弊せしむると同時に、その官民を倨傲ならしめ、又他國の猜疑嫉妬の標的となり、もつて國家を危地に陥れる憂ひがある。

甲國が乙國に對して、必ず勝つだけの軍備を蓄へれば、乙國は必ず丙丁國と聯合して負けない工夫をする。甲が二ヶ國の同盟を作れば、乙は必ず三四ヶ國の聯合を作る。大戰以前のドイツは、奥、伊土、勃等を合縱して安全を求めたが、遂に前世界の反抗を受けてあの慘敗を招いたではないか。

## 新時代に善處すべき新愛國心

### (一五) 愛國心の濫用

前回の世界戦争の死傷者は、敵味方合せて一千万人を超過したといふことだが、憐れむべし、かれらが拂つたところのこの大犠牲は、國家若しくは民族、若しくは世界人類のために、何の利益（精神的及び物質的）をもたらしたか。

少數なる陸海軍將校や、列國政治家をして、その功名をなさしめ



たのと、多數の戦時成金を製造した外には、何物もないやうだ。前者は「一將功成つて萬骨枯れた」のであり、後者は、戦死者の血液骸骨を壓搾して、黄金を造り、これを成金の倉庫に収めたのである。いづれも多數國民の損害にはなつたが、その利益にはならなかつた。

平和回復後、すでに十三年を経たが、勝者も、敗者も、共に非常の困苦に陥つてをり、世界列國みなそのなすところを知らないのが何より證據であるまいか。列國人民は、政治家の口車に乗せられ、たゞ一圖に「お國のため」とのみ考へて、戦役に服したのだが、その犠牲が少しもお國のためにならなかつた事實は、今日となつては、

如何なる愚人にも明白に了解されたであらう。即ち政治家は、人民の愛國心を利用して、その功名心を満足せしめたに過ぎなかつたのである。その後の結果によつて、明白にこの事實を認識し得た一千万もの戦死者は、今頃は地下においてその欺かれたことを知り、死して瞑する能はず、切齒扼腕してゐるだらう。實以て氣の毒の至りである。世に煽動政治家や、戦時成金ほど罪なものはない。

#### (一六) 愛國心の由來とその利弊

こゝにおいて眞に國を愛するものは、徒らに前世界の舊思想や、舊感情のみに捉はれず、新世界に善處すべき新愛國心を考索しなけ

ればならぬ。古來世の識者中には愛國心を以て「偏狹なる劣情」の如く論難したものが可なり多い。私はさうは思はないが、さりとしてある人々のいふが如く、これを以て常に最高至貴、一點無疵の優越物であるとも考へない。

自己愛—親族愛—郷土愛

民族愛—人種愛—人類愛

國家愛—自洲愛—世界愛

人間の愛情は、ざつと右の如き系統をたどつて、發達するものやうに思はれる。即ちその近くかつ小なるものにはじまつて、次第に一層遠く、一層大なるものに到達するのである。しかしてより遠く、より大なるものために、より近く、より小さきものを、犠牲に供することは、常人のなし難いところであるが、その心情は高尚優美なるものに相違ない。ゆゑに尊重すべき價值がある。自己のわがまを制して、父子兄弟の利益をはかるが如き、一家の私利を捨て、郷土の利益をはかるが如き、また一郷一村の利益よりも、むしろ一國一民族の利益に重きを置くが如き、いづれも皆近きより遠きに及び、小より大に向ふの働きであつて、普通人のなし難しとするところである。ゆゑに尊重すべき價值がある。

文化なほ低度なる封建時代にあつては、普通人は比較的小にしてかつ近き藩族のために、その身命を捧ぐるが、より大にして貴いも

のには割合に冷淡であつた。いや盡すべき道をしらなかつたのである。かの四十七士の如きは、古今無類の忠義ものには相違ないが、その忠義心は比較的近くしてかつ小なる自己の藩主に向つて、これを捧げたに過ぎなかつた。比較にもならないほど、高く貴くかつ偉大なる帝室のためには、一舉手一投足の忠義をも盡さなかつた。赤穂城は京都に近いから、かれらの多數は帝室式微の情状を日夕見聞してをつたに相違ないが、これを挽回するためになんらの働きをもなさなかつた。これは、かれらが悪いのではなく、封建割據といふ時勢が悪かつたのだ。愛藩心(郷土愛)が未だ愛國心(國家愛)に發達しなかつたからである。その四十七士が、忠臣義士の手本として今日

もなほ尊敬されるのは、より小なる自己愛親族愛の時代において、より大なる藩主愛を實行したからだ。

楠公父子が、四十七士よりも、なほ多く尊敬せられるのは、より大なる國家愛を實行したからだ。

しかし、現在の如く、世界組織が進化して、すでに人類的一个の有機體となつた以上は、國家愛だけではその國家を保全することは出来ない。さらに一步を進めて、より大なる世界愛人類愛を加味しなければならぬ。その次第は、鎖國攘夷封建割據時代には、その藩侯に對する忠義でよかつたが、王政古に復し、全國すでに一體となつた以上は、これを擴張しなければならなくなつて來たのと、およ

を同一の情理によるものである。

しかるに歐米列國人は、今なほ國家愛の範圍を超越する能はずして、戦債、償金、軍縮、關稅、通貨、移住等の世界的問題を解決するに、從來の國家的標準を以てせんと焦慮苦心してゐる。ローザンヌ會議、ジュネーヴ會議、オツタワ會議、如何に會議を重ねても十分に満足すべき結果を得る能はざるゆるんの最大原因はこゝにあるのだ。

民族主義をして人類主義と調和せしめ、國家愛をして世界愛と調和せしめざる限りは、幾たび列國會議を開いても満足な結果は得られない。従つて列國の不安困弊は、なほ當分繼續するものと見るべきであらう。

インド人や、支那人は、近年まで民族愛、國家愛等の情念をもたなかつた。釋迦孔子の説いたところは、一舉にして世界愛、人類愛に躍進すべき性質のものである。ゆるに久しく他國の支配を受けて平氣でゐたが、近來は歐米諸國から民族愛、國家愛等の教育を受け、また日本帝國の勃興を見て、俄に愛國心を發作し、自主自立の運動を開始した。かれ等世界の二大民族が、現に容易ならざる不安状態に陥つて、自分も苦しみ他國をも苦しませてゐるのは民族主義傳播の結果である。歐米列國はこの主義を宣傳して、自らその結果を苦惱してゐるのだ。己れに出でたものは己れに返る、因果應報ほど觀

面なものはない。

(一七) 列國の動靜一斑

戦債や、償金に關して、今日までに提出された對案中では、英國の石版一掃意見が、最もよい。しかしてイタリーは直ちに全然これに賛成した。軍縮問題については、米國の軍事費削減論が一番よい。しかしてイタリーは時を移さず全部これに賛成した。他國の政治家は背後の民衆を顧みて、躊躇逡巡、いひたいこともいはずにゐるが、ムツソリーニは、直截明快よい事はよいと斷言して、直ちにこれに賛成する。伊國代表者の言行は、近來水際立つて立派に見え

る。これは獨裁政治と、民衆政治の相違によつて、現れた事象の一端である。かく申せばとて私は決して獨裁主義に賛成するものではない。ムツソリーニがあれば、時あつて獨裁政治もまた可なり、といふ程度の賛成に過ぎない。ムツソリーニなしの獨裁政治、即ち鵜の眞似をする烏ほど危険なものはない。この邊まではムツソリーニの言行は甚だよいが、これから先になると、彼もまた國際主義と調和せざる民族主義の心粹者であつて、やゝもすれば自己本位に物を考へすぎる。他國を害しても自國だけ利益を得ようとするから、結局自他共に損害を被ることになる。彼は曠世の傑物には相違ないが、なほ時代錯誤家の一人たるを免れない。イタリーは彼があるが

ために、非常に向上發達しつゝ、あるが、結局は「その人亡びてその政熄む」の例に漏れず、差引勘定あまり利益はなからうかと思はれる。

## 附記

ムツソリーニ政治の評判があまりよいから、私は新しくその實況を視察するため、先般ちよつとイタリーに遊んだ。私が、二十餘年以前に遊んだ時は、スリ、強窃盜、乞丐兒の類が、非常に多く、その上に市街も汚なく、實に不愉快な國柄であつた。その當時、私は、ある友人に「スリと乞食と強請奴を合せて三分せよ。一人のイタリー人を得るであらう」と書いて送つたが、それが私の詐らざる當時の感想であつた。

しかるに、今回再遊して見ると、市街はよく清掃されて、殆んど



英佛に劣らず、前には各所に散在してゐた乞丐兒の如きは、影だに見えず、その上、接觸するところの車夫、馬丁、ホテルおよび飲食店の使用人に至るまで以前とは全然別個人のごとく、慇懃に振舞ふものが多かつた。強窃盜殺傷犯（黒シヤツ組がその反對黨を殺傷するほかは）の類も、大いに減少したさうだ。市區改正、農工業の進歩改善もまた著大なやうに思はれた。

僅十年にも足らない短日月中にどうしてこんなに見違へるほどの事功（精神のおよび物質的）を擧ぐる事が出来たのだらう？ ひたすら驚嘆のほかはない、豪傑一人の力はかくまで偉大なものであることをはじめて悟つた。しかし、ム氏のやり方には無理が多い。

その結果は如何に良好偉大であつても恐らくは永續しないだらう。今日直ちにこれを謳歌するのは輕卒に過ぎはしまいか。いはんやムツソリーニ未だ出でざる邦國においてをや。

佛國は「列國の軍備を國際聯盟の配下に置かう」といふが如き突飛な空論を提起するの外、大體においては、いづれの問題についてもあまり利己的主張をなしすぎて、列國の同情を失ひつゝある。前回の大戦争に際し、パリをはじめ全國ことごとく獨軍に蹂躪されて焦土とならなかつたのは、全く世界列國の同情をひき、その應援を受けたお蔭であつた。しかるに「咽喉元すぎれば熱さを忘れる」といふ比喻の如く、戦後の佛國は、經濟的にも、外交的にも、あまりわが

まゝを働きすぎる、佛國は世界の經濟的復興に参加せずしてむしろこれを妨害しつゝある。他年一旦獨佛相戦ふが如きことあらば、英、伊、米、露は再び佛國を援助しないかも知れない。知らず三千餘萬の佛人は六千餘萬の獨人に對して、何の術を以てその國土民族を防御せんと欲するか。一方においては、連續的にその同情を失ふべき言行をなしながら、他方においては英米に向つて安全の保障を請求しつゝある。その不所存もまた甚だしと申すべし。安全は外物にあらずして、内心にあるのだ。

## 軍縮に必要な國際裁判條約

## (一八) 軍縮問題の前途

世界現在の最大問題は何といつても軍備縮小である。

帶甲百萬、列國みな虎視眈々たる間は、世界の不安状態は決して除かれない。その經濟的困難も救はれない。誰が何といつてもこれは争ふことの出来ない事實である。前車の覆轍にも懲りず、文明列國は再びこれを踏襲する積りなのか。或は二度と再び、無益有害の戦

争はこれを繰返へさない積りなのか。これが列國の死活の分れ目である。

ジュネーヴの軍縮會議その他において論議するところを見るに、いづれも皆戦争本位の意見にあらざるはない。それほど戦争がしたければ軍縮會議などは開かぬ方がよい。戦争をする積りで、意見を立てるから、列國の共同一致がむづかしくなるが、もし戦争をしない積りで考へるなら一致點を見出すのは、決して困難なことではない。文明列國間に、再び戦争が起れば、國家は滅亡すること、ほとんど疑ひを容るべき餘地はない。しかるにそれでもなほ戦争がしたいといふのは何のためだらう？ どう考へて見ても正氣の沙汰とは



思はれないほどの不可思議事件である。畢竟戦勝によつて利益を得た舊世界の迷夢がまださめないためであらう。この迷夢がさめず、戦争心理が止まない間は、今回の軍縮會議も無効に終るだらうが、將來のもまた無効に歸するだらう。骨折損の草疲儲けに過ぎぬ。そんなことは、迷夢のさめるまで止めた方がよからう。

### (一九) 文化の進歩と國際裁判

古昔文化がなほ低度であつた頃は、強い者は誰でも裁判に服従しなかつた。しかるに今日は如何なる強者でも國內においては裁判に服従するまでに進歩した。列國の君主すら、憲法法律に服従してゐ

る。同じ人間が既往においてこの通りに變化した如く、現在においても文化進歩の現狀に適應するだけの變化はしてもよささうなものだ。いやさうしなければ、前段においてかずく繰返した理法と事實によつて、國家および人類の生存は將來不可能になるのである。

現在國內的に實行されてゐる裁判服従の精神を擴張して、國際會議にまでおよぼすことは決して出来ない相談ではあるまい。文明國人の知識、道徳がすでに現在の程度まで進展した以上は、國際裁判も、また國內裁判とほゞ同様の結果を生ずるであらう。しかるに列國の政治家は、自己の功名心に驅られてか、強ひて國際裁判の危険を高唱しそれを承認しようとしなない。かれらが國際裁判に反對する

のは、畢竟自ら不正の心を抱き、機會さへあれば、自己もしくは自國のために不義不當の利得を壟斷しようと考えるからであらう。いやしくも俯仰天地に恥ざる心事を包藏するならば、これに反對すべき理由はあるまい。自ら不正不義を行はんと欲するものは、必ず常に他人の正義觀念を疑ふものである。それも不正不義の所業により、他國に損害を與へて、自國のみを利益することが出来た時代ならば、感情の強い人間として仕方がないこととあきらめてよからうが、もはやそんなことの出来ない現在の世界においては、餘りといへば馬鹿馬鹿しき次第、國際争議も國內事件と同じやうに裁判に附すべく邁進すべきであらう。

現に武力によつて、無理を行ふことの出来ない小國は、いづれもみな國際裁判を歓迎する。種々の口實を設けて、これに反對するものは、武力によつて不義をも行ふことの出来るやうな強國の側である。しかもそれは出来るやうに見えるだけで、實際には出来ないことはドイツ帝國の覆轍を見ればわかる。

さればいづれの點より觀察しても、文明列國は速かに國際裁判條約を締結實行すべきであらう。いやしくもさうさへすれば軍縮問題の如きは、勞せずして自然に解決されるのである。

## 岐路に立つ日本の使命

### (二〇) 小なる国際聯盟

アイルランド、インド、カナダ、濠洲、南阿等の自治國は、名義は、英領であるが、事實は、何れも獨立國である。従つて、いはゆる英帝國なるものは、一種の国際聯盟であつて、英人も、自ら小なる国際聯盟と稱してゐる。アイルランド自由國は、かつて歐洲大戦争に乗じて、叛旗を翻へし、ドイツに内應したほどの民族であり、ま

たカナダには、多數の佛人がをり、また南阿聯邦は、久しく英國に反抗したオランダ民族の勢力下にある。それにも拘らず、現在は、干戈に訴へずして、悉皆の問題を解決してゐる。

又アメリカ合衆國は、各々獨立の立法權と行政權を有する四十八州の聯合體であつて、一種の国際聯盟である。ドイツ共和國も各々獨立の政府を戴く十六七の國家と、自由都市よりなる所の聯盟である。

特に不思議なのは、南米諸國で、同じ歐洲人の植民地でありながら、各々別個の國を建てた爲、數々戦争を起すが、北米合衆國は、聯盟組織をとつたため、互に親和してゐる。聯邦内の戦争は、南北戦争

が、一回あつたゞけた。同學校の生徒でも、その寄宿舎を東西南北に分てば、黨を結んで抗争するが、一寮の内に置けば、仲よく暮すと同じやうなものだ。詰まり人間は、成長した子供にすぎない。

それは兎に角、その利害得失、風俗、習慣、感情——中には民族までも異にする所の數ヶ國、又は數十ヶ國が、右三例の如く、一種の小さな國際聯盟を作つて、戦争なしに仲よく暮す事が出来る以上は、大きな國際聯盟でも、強大國が、無理わがま、さへしななければ、總ての國際問題を、協議と裁判とに由つて解決する事が出来る筈だ。しかしてその利益は、大小強弱の別なく、廣く全世界に及ぶこととなる。故に右三種の小聯盟の規約、その他實行方法を參酌して

大聯盟を改善したら好からう。その責任は、國際聯盟の發議者たる米國が取つて、今度は自分もこれに加盟すべきである。

### (二二) 強大國民と弱小國民の優劣

どこの人間でも、大國強國の民となつて、威張りたがるが、しかし、人間は、素質が下れば下る程威張りたがり、素質が上れば、愈謙抑に赴くものである。下郎や足輕は、殿様より威張りたがる風がある。

小弱國の民は、國家に依頼せずして、自力に依頼する。ゆるゑに個人としては、強大國民に優るものが多い。貧家の子弟には富家の子

弟に優るのが多いのと、同一の理由であらう。

私が四十五年前に、ドイツに遊んだ時には、ドイツ人は、未だ質素謙讓で、旅客に好感を與へる民族であつたが、その後、二十餘年を経て、再遊した時は、傲慢不遜にして、生意氣なものが多かつた。今回更に二十餘年を経て、遊んで見れば、前とは變つて、意氣はやや衰へたやうだが、頗る生意氣さが減少して、好感を與へる國民となつてゐた。私は、國民は僅の間にかうも變化するものかと驚いた。

民族の性格は、國家の強弱と、正反對に、進退するものと見える。わが大和民族も、この事實を看取して、自ら反省する必要があらう。

しかのみならず、ベルギー、オランダ、ノールウエー、スイス、スエーデン等の公債は、強大國の公債よりも、高價で賣買せられ、その人民の平均富力も多くは他の強大國民に超過してゐる。租税は軽く、善政はしかれ、人民の安全幸福なること、強大國民にまさりはするとも、劣りはしない。たゞ缺く所は、武力による強大の誇りである。かれ等はそれを有つてゐない。それを有たんと欲してもゐないやうである。

また無法な敵國攻撃を受けた場合においても、抵抗力の少ない弱小國の損害は、抵抗力の多い強大國より却つて少ない事が多い。現に前回の大戦争に方り、ベルギーの損害は、却つて佛國よりも少な

かつた。また英國の強大を以てするも、なほ無抵抗主義者のガンヂーに對して、策の出る所を知らないのは、強者未だ必ずしも強ならず、弱者未だ必ずしも弱ならざる一例であらうか。

眞に經國濟民の大業に任ずるものは、單に數世期以前の舊思想舊感情のみに捉はれず、深く時勢の推移を洞察して、時代相當の施設をなすべきである。尊い感情の動きもあるが、誤つても下郎や足輕の態を學んで、國家生民の眞誠の利益幸福を犠牲に供してはならない。

蠻人は暴力だけで、その勝敗を決するから、力の強弱が、貴賤上下を分つ標準となつたのであるが、文化の進むに従ひ、知識道德經濟

力等、腕力以外に、人間の尊卑優劣を定むる各種の標準が出来た。將來文化が、益々進めば、各國々民は、徒らに武力や富力のみを誇らずして、その知識道德及善良なる風俗習慣の向上等、則ち文化の高さを誇るやうになる。今日でも、その傾向は、すでに餘程強くなつてゐるが、まだ足らない。將來は、必ず大いにさうなるに違ひない。否、心あるものは、さうなるやうに盡力しなければならぬ。徒らに力の強大や富の裕さのみを誇るは、未開國の遺習に過ぎない。

### (三三) 物質及人類移動の自由

論旨は、少し横道にそれるが、論じてこゝに至れば、貧富強弱の國際的懸隔に論及せざるを得ない。

各國とも自國の富裕を誇り、將來永くこれを維持するのみならず、益々これを強大ならしめんと欲する心がある。

然るに、文化の進運は、將來大いに貧富強弱の國際的懸隔を減少すべき傾向を示してゐる。

この傾向は、國內的には、すでに最も明白に實現しつつある。平等主義は、すでに文明國を風靡し、政治的平等より、更に進んで、社會的經濟的平等に及び、世界到る所として、共產主義者を見ざるはない。好し、共產とまでは行かずとも、富の懸隔を矯正防止して

成るだけこれを平均にしようとする社會的立法は、何れの國にも行はれてゐる。

目下盛んに國內的に現れてゐる所のこの機運は、やがて國際的にも擴及すべき性質をもつてゐる。文化の進運は、昔だ國內において、成るべく貧富強弱を平均ならしむるのみならず、國際間の貧富大小強弱をも、また成るべくこれを平均せしめざれば、止まぬであらう。現在では、列國みな舊世界の迷夢に捉はれて、輸入制限・關稅障壁・移住制限・原料品專有等、經濟の原則にも、また正義人道にも背反する所の惡法を設けて、自國だけの富強を謀つてゐるが、その結果は、必ず悪い。現に佛國の如きは、輸入制限の弊害を悟つて、こ

九四  
れを改めにかゝつてゐる。國內的に行つて悪いものが、國際的に行つて、善からう筈がない。それを善いと思ふのは、短見者流の妄想に過ぎない。

全世界の土地や物資は、元來人類總體の使用に供すべきものである。地球は、決してアジア人のために造られたものでもなければ、また歐米人のために、造られたものでもない。この簡明なる原則は、文化の進むに従つて、理解實行せられるのである。現在でも、古昔に比すれば、すでに大いに實行されてゐるが、將來は、益々大に實行されるに相違ない。

この進運に對する最大妨碍物は、各國が自國の強大のみを誇らん

とする狭固の心情である。苟くもこの心情ある以上は、さうとは知らずして、頻と列國間の平等化平均化を妨碍する事になる。

所で、先づ考へなければならぬ事は、わが國の如く、領土狭少にして、しかも物資豊富ならざる國家國民の利害である。

(イ)割據主義によつて、狭く守るがよい乎。

(ロ)共存共榮主義によつて、列國人と共に、全世界の土地物資を使用する方がよい乎。

わが國は兵力だけでは、やり方によつては、歐米を凌駕する事も出来やうが、領土物資においては、到底歐米に對抗する事は出来ない。如何に奮發しても百年や二百年では、出来ない。むしろ國際主



義を高唱し、以て全世界の土地物資を共用する方が、好からうではないか。

籠城主義や、孤立主義は、英、米、露、支の如き廣大なる領域と豊富なる物資の所有者には、好いかも知れないが（それすら疑問）その正反對である所のわが日本には、適當しない。榮螺の籠城は、枯魚の市に上る憂ひがある。それよりも、文化の進運に乗じて、開放主義の急先鋒となり、全世界の物資、人類の自由移動を主張し、實行せしむる方がよろしい。それには、武力の偏重に墮せず、努めてその氣宇を高尙にして、世界の小弱國を援け、共々に正義の大道を濶歩しなければならぬ。これが世界を救ふと同時に、自らを救

ふ日本の使命である。日本帝國の安危盛衰はかゝつて、それが出来るか出来ざるかにあるのだ。王道を踐んで小國の味方となるか。霸道を執つて露曼の覆轍を踏むか、わが死活の分れ目である。

現在列國が、文化の進運に背いて施設する、各種の妨碍物を排除して、物資人類の移動を自由にすれば、一方においては、世界の經濟的復活を助くると同時に、他方においては、漸次列國間の貧富の大懸隔を矯正する事も出来る。また軍備縮小は、列國間における強弱の懸隔を減小し、その撤廢は、これを平等に導く、然してその結果は、全世界人類の安全幸福を増加する事になる。

知らず、わが國人は、この大使命を成就する意旨なきか。孤立か、

共同か、籠城か、進出か。讀者請ふこれを再思三考せよ。

九八

世界審判の岐路に立つ日本 終

岐路に立つ日本の審判の日  
定價三十三銭

昭和七年十月六日印刷  
昭和七年十月十一日發行

著作 尾崎行雄  
發行 東京市京橋區京橋三ノ一 千倉 豊  
印刷 東京市神田區今川小路一ノ一 山縣 精一

發兌 東京・京橋 第一相互館 千倉書房  
振替東京九七八

◆◆◆ 著名版重評好 ◆◆◆

小島 精一著 定價一圓八十錢 送料十二錢

# 日本計畫經濟論

【版十】

從來の産業組織は自動的恢復の機能を喪ひ既往一切の卓説も此狂嵐の前に何等の權威も無い。著者は茲に多年の蘊蓄を傾倒して敢然、日滿經濟を融合せる積極的計畫經濟を提唱する。

谷口 吉彦著 定價一圓五十錢 送料十二錢

# 購買力補給案

【版五十】

行詰れる難局打開の唯一の應急對策！我が財界、學界に俄然大センセイションを捲き起し、今や全國的論議の中心となつゝある國民待望の『購買力補給案』とはそも何か？

安部 磯雄著 定價三十錢 送料四錢

# 産業奉還論

【刊新最】

産業奉還による經濟の國家統制のみ繁榮への唯一の途だ。飢餓と窮民なき平和の社會はそこに始めて生れるであらう。社會主義の著者たる著者の抱懐する立正安國の大信念。

讀賣新聞 經濟部長 山崎靖純著 定價三十錢 送料四錢

# 圓爲替はどうなる？

【爲替平衡資金制度】

【版卅忽】

今や爲替問題は急歩調でわれわれの生活問題と化した。本書は、最近の圓爲替暴落の真相・將來の見透し及び金本位制度の行詰りの真相等を一般大衆に平易に解説せる近來の好著。

(1) 録目書圖房書倉千

著者	高田保馬著	勝 正 著	那須 皓著	高橋 龜吉著	美濃部達吉著	小泉 信三著	小島 精一著	報知新聞編	高橋 龜吉著	平林初之輔著	井上 洋之助著	河合榮治郎著	清澤 潤著	東京學藝大編	白柳 秀湖著
書名	價格と獨占	税の話(十三版)	日本農業論(再版)	資本主義頽廢の諸相	行政裁判法	マルクシズムとボルシエギズム(再版)	日本金融資本論(再版)	談話室(四版)	實用經濟學(五版)	文學理論の諸問題	國民經濟の立直と金解禁(二百版)	英國労働黨のイデオロギー	轉換期の日本(五版)	常識百話(五版)	日本經濟革命史(五版)
定價	二・三〇	一・五〇	二・五〇	二・二〇	二・八〇	二・三〇	二・五〇	一・五〇	一・八〇	一・八〇	一・三〇	一・五〇	一・八〇	一・五〇	一・八〇
送料	二	八	五	二	八	二	二	〇	二	二	〇	〇	二	〇	〇
著者	小島昌太郎著	水上 鐵治郎著	小島 精一著	向井 鹿松著	上野 陽一著	松永安左衛門著	白柳 秀湖著	高橋 龜吉著	報知新聞編	平林初之輔著	永井 亨著	中川 靜著	山川 均著	白柳 秀湖著	大崎 厚夫著
書名	海運經濟要論	英國の労働組合	産業合理化(十五版)	經營經濟學總論(十二版)	産業能率論(十二版)	産業改造の途(五十版)	親分子分(英雄編)(十版)	「經濟國難來」(五版)	談話室漫談篇(五版)	近世社會思想講話	社會の話(五版)	廣 告 論	社會主義の話(六版)	親分子分(俠客編)(七版)	世界と動(十二傑)(五版)
定價	二・五〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・八〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・八〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇
送料	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

東 京 一 橋 館 千 倉 書 房 東 京 八 七 九

(2) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定價	著者	書名	定價
勝正憲著	所得稅の話(七版)	價一・六〇 送料二〇	長野朗著	支那の真相(五版)	價一・五〇 送料二〇
報知新聞經濟部編	能率増進時代(五版)	價一・五〇 送料二〇	武野藤介著	文士の側面裏面(五版)	價一・五〇 送料二〇
福田敬太郎著	市場論(九版)	價一・五〇 送料二〇	上野陽一著	能率祕話(十二版)	價一・五〇 送料二〇
政經研究會編	各政黨の主張(三十版)	價一・三〇 送料二〇	中外經濟部編	經濟國難打開の途(五版)	價一・五〇 送料二〇
土田杏村著	文明は何處へ行く(五版)	價一・五〇 送料二〇	細田民樹著	黒の死刑女囚(五版)	價一・五〇 送料二〇
増地庸治郎著	企業形態論(八版)	價一・五〇 送料二〇	藤井 悌著	英國労働黨の組織・沿革・政策	價一・五〇 送料二〇
小島精一著	世界經濟と合理化運動(五版)	價一・五〇 送料二〇	藤本幸太郎著	海上保險論(七版)	價一・五〇 送料二〇
白柳秀湖著	親分子分(浪人編)(七版)	價一・五〇 送料二〇	上野陽一著	家庭經濟の祕訣(十版)	價一・九〇 送料二〇
小林行昌著	賣買論(九版)	價一・五〇 送料二〇	勝正憲著	企業と租稅(七版)	價一・五〇 送料二〇
石濱知行著	資本主義發達史(四版)	價一・七〇 送料二〇	報知新聞經濟部編	經濟相談(十版)	價一・五〇 送料二〇
小林行昌著	關稅と物價	價二・五〇 送料二〇	堀眞琴著	國家論	價一・三〇 送料二〇
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	價五・〇〇 送料二〇	堀光龜著	海運(八版)	價一・五〇 送料二〇
小島精一著	企業統制論(七版)	價一・五〇 送料二〇	增井幸雄著	陸運(七版)	價一・五〇 送料二〇
神長倉眞民著	財界巡禮記(五版)	價一・五〇 送料二〇	山川均著	勞働組合の話(四版)	價一・五〇 送料二〇
報知新聞調查部編	ナンセンス・ジャパン(五版)	價一・五〇 送料二〇	世界經濟研究所編	世界經濟(總觀)(七版)	價一・五〇 送料二〇

(3) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定價	著者	書名	定價
前田美稻著	豫算の知識(三版)	價一・五〇 送料二〇	林恒彦著	生活指導	價一・五〇 送料二〇
佐藤 弘著	世界經濟地理(八版)	價一・五〇 送料二〇	帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	價一・五〇 送料二〇
米野豐實著	サウエート經濟の實體	價一・五〇 送料二〇	清澤 洸著	アメリカを裸體にす(十三版)	價一・五〇 送料二〇
中村第三著	販賣革命(六版)	價一・二〇 送料二〇	三邊金藏著	會計監査(八版)	價一・五〇 送料二〇
高木友三郎著	日本經濟の實體(四版)	價一・〇〇 送料二〇	北林惣吉著	淺野總一郎傳(十版)	價一・五〇 送料二〇
勝田貞次著	投資相談(十五版)	價一・五〇 送料二〇	報知新聞經濟部編	中小産業の活路	價一・八〇 送料二〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構(三版)	價一・八〇 送料二〇	勝田貞次著	不景氣時代の投資法(十版)	價一・五〇 送料二〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	價一・二〇 送料二〇	白柳秀湖著	食慾と愛慾(六版)	價一・六〇 送料二〇
大辻司郎著	漫談集	價一・〇〇 送料二〇	勝正憲著	營業收益稅の話(八版)	價一・五〇 送料二〇
白柳秀湖著	社會展開の動力(三版)	價一・六〇 送料二〇	國松 豊著	工場經營論(六版)	價一・五〇 送料二〇
上田貞次郎著	商工經營(十版)	價一・五〇 送料二〇	青野季吉著	實踐的文學論	價一・六〇 送料二〇
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	價一・五〇 送料二〇	北野大吉著	婦人運動の開祖 メリ・ウオーストクラフト	價一・五〇 送料二〇
後藤朝太郎著	哲人支那	價一・五〇 送料二〇	小汀利得著	街頭經濟學(十九版)	價一・五〇 送料二〇
報知新聞調查部編	ユーモア百話(六版)	價一・五〇 送料二〇	近松秋江著	文壇三十年	價一・八〇 送料二〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	價一・〇〇 送料二〇	北林惣吉著	淺野總一郎傳(十版)	價一・五〇 送料二〇

(5) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
中野正剛著	沈滞日本の更生(五十版)	送料・〇・三〇	村瀨玄著	工業會計の常識	送料・一・〇〇
井關十二郎著	販賣の常識	送料・一・〇〇	藤本幸太郎著	商業統計の常識	送料・一・〇〇
坂口武之助著	商品學	送料・一・五〇	内池廉吉著	商業學の常識	送料・一・〇〇
小林行昌著	商業算術の常識(五版)	送料・一・〇〇	小松 綠著	維新革命秘話	送料・一・〇〇
山川 均著	無産政黨の話(三版)	送料・一・〇〇	ペンネット著	人生如何に生くべきか	送料・一・〇〇
加藤三郎譯	世界商業秘話	送料・一・六〇	ベックリンソン著	列強經濟のチレンマ	送料・一・二〇
アインチヒ著	世界經濟恐慌の解剖(五版)	送料・一・二〇	伊地知軍司譯	動亂支那の真相	送料・一・〇〇
木村謙八郎譯	金融統制論	送料・一・五〇	長野 朗著	列強の侵略戦(廿版)	送料・一・〇〇
高島佐一郎著	日本富豪發生學 下土階級革命の巻	送料・一・六〇	武藤山治著	金輸出再禁止(百版)	送料・一・〇〇
白柳秀湖著	アメリカの	送料・一・〇〇	長野 朗著	暗雲た だよふ 滿蒙(廿五版)	送料・一・〇〇
デニール著	世界經濟征服(八版)	送料・一・五〇	同 著	滿蒙併呑か獨立?(廿版)	送料・一・〇〇
香月 保譯	商法改正の話	送料・一・〇〇	同 著	列強の侵略戦(廿版)	送料・一・〇〇
松本蒸治著	世界の動きと日本の立場(五十版)	送料・一・〇〇	後藤朝太郎著	支那の民情(廿版)	送料・一・〇〇
本多熊太郎著	日本位制の危機(卅五版)	送料・一・〇〇	吉田良三著	會計學の常識	送料・一・〇〇
木村謙八郎著	事務管理總論	送料・一・五〇	ホブソン著	世界經濟の統一	送料・一・〇〇
金子利八郎著	商品學の常識	送料・一・〇〇	中島 徹三譯		送料・一・〇〇
佐藤 弘著		送料・一・〇〇	佐々木道雄著	商業數學	送料・一・五〇

(4) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
野守 廣著	信託經營論	送料・一・五〇	高橋龜吉著	景氣はドウなる(九版)	送料・一・五〇
内藤 章著	巴里情痴傳(五版)	送料・一・五〇	藤田貞次著	景氣の見方(三版)	送料・一・五〇
木村 毅著	金本位制度の理論と實際	送料・一・三〇	福田敬太郎著	商業概論(六版)	送料・一・五〇
宮川貞一郎譯	政治の貧困	送料・一・五〇	太田哲三著	銀行簿記の常識(五版)	送料・一・〇〇
佐々弘雄著	成野翁物語	送料・一・五〇	上野陽一著	販賣心理(五版)	送料・一・五〇
北林惣吉著	金融の常識(七版)	送料・一・五〇	都新聞峰島編	法律相談(六版)	送料・一・五〇
井關孝雄著	住友物語(十二版)	送料・一・五〇	都新聞峰島編	衛生相談(五版)	送料・一・五〇
白柳秀湖著	經營統計(七版)	送料・一・五〇	アインチヒ著	國際金融爭覇戦(七版)	送料・一・〇〇
小林 新著	何が財界を動かすか(九版)	送料・一・五〇	山本米治譯	小資本開業案内(六版)	送料・一・五〇
山崎靖純著	投資基礎學(四版)	送料・一・五〇	報知新聞編	取引所論(五版)	送料・一・五〇
北林惣吉著	倉庫論(七版)	送料・一・五〇	報知新聞編	商業簿記の常識(五版)	送料・一・〇〇
内池廉吉著	不安世界の大通り(九版)	送料・一・五〇	藤田國之助著	フーズア景氣はドウなる(五十九版)	送料・一・〇〇
清澤 洸著	投資の仕方(三版)	送料・一・五〇	黒澤 清著	世界市場を奇らすロシア五ヶ年計畫(廿五版)	送料・一・五〇
勝田貞次著	ラグーザお玉(五版)	送料・一・八〇	山崎靖純著	明日を待つ彼	送料・一・五〇
木村 毅著	財界を牛耳る人々(九版)	送料・一・五〇	国民新聞編	尖端的販賣戰術(五版)	送料・一・五〇
報知新聞編		送料・一・五〇	中外商業編		送料・一・五〇
經濟部編		送料・一・五〇			送料・一・五〇

(6) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
コルン著	經濟の國家統制(五版)	價二・〇〇	小汀利得著	漫談經濟學(卅五版)	價一・五〇
清水元著	金本位制動搖と日本金融の將來(八版)	價一・二〇	中外商業編輯局編	政治家群像(五版)	價一・五〇
高島佐一郎著	簿記學	價一・五〇	上野陽一著	經營作戦(七版)	價一・五〇
原口亮平著	日本富豪發生學(開成財權争奪の卷)	價一・六〇	森山四郎著	滿蒙小資本開業案内(卅版)	價一・二〇
白柳秀湖著	物富み	價一・〇〇	高木友三郎著	東亞モンロー主義(卅版)	價一・三〇
小原喜三郎著	人富まざるの矛盾	價一・〇〇	佐々木良雄著	販賣秘法	價一・五〇
高橋龜吉著	世界破局と日本經濟の變革(七版)	價一・五〇	平井泰太郎著	經營學の常識(四版)	價一・〇〇
保科貞次著	空襲!!(廿版)	價一・〇〇	波邊進著	此の金恐慌(五版)	價一・二〇
猪谷善一著	アジア經濟の展望	價一・五〇	勝田貞次著	相場戰術(十五版)	價一・八〇
洪純一著	日本財政經濟論(四版)	價三・〇〇	武藤山治著	我財界の緊急對策	價一・五〇
モートン著	安達さんの心算を語る(八十版)	價一・三〇	高垣寅次郎著	産業心理學	價一・五〇
伊豆富人著	弗賣買の解剖(百版)	價一・三〇	金子弘著	滿洲國の開發と日本經濟の動向	價一・二〇
森田久著	經營學文獻解説	價一・五〇	新報編輯部編	伯樂II 澁澤翁(十版)	價一・〇〇
平井泰太郎著	轉換日本の動向(廿版)	價一・三〇	宇野木忠著	變革期の財界と其對策(九版)	價一・五〇
中野正剛著	世界金融恐慌の真相	價一・二〇	高橋龜吉著	相場實話(五版)	價一・五〇
アインツツヒ著	金再禁止と我財界の前途(百版)	價一・三〇			
木村毅著					

(7) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
白柳秀湖著	現代財閥罪惡史(卅版)	價一・六〇	高島佐一郎著	金本位の後に來るもの(八版)	價一・八〇
土田杏村著	現代世相論(廿版)	價一・五〇	増地庸治郎著	商業通論	價一・五〇
河合良成著	非常時の經濟對策(七版)	價一・三〇	山本勝市著	經濟計算	價一・五〇
小島精一著	日本計畫經濟論(十版)	價一・八〇	山崎靖純著	圓爲替はどうなる(卅版)	價一・三〇
木村毅著	S・O・Sのアメリカ	價一・五〇	白柳秀湖著	親分子分(政黨編)	價一・五〇
勝田貞次著	富の分布か新平價か?	價一・五〇	勝正憲著	相續税の話	價一・五〇
ペーシユ著	景氣轉換論	價一・二〇	安部磯雄著	産業奉還論	價一・三〇
横尾惣三郎著	農村非常對策(廿萬)	價一・三〇	尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	價一・三〇
マハン大佐著	米國海軍戰略	價二・五〇			
尾崎中佐著	歴史は繰返すか	價一・三〇			
長崎英造著	經濟學の基礎知識(十五版)	價一・五〇			
高橋龜吉著	日本再建論(十萬)	價一・三〇			
山道爽一著	購買力補給案(十五版)	價一・五〇			
谷口吉彦著	經營學入門	價一・三〇			
平井泰太郎著	計畫經濟と管理法	價一・五〇			
上野陽一著					

631  
36



三  
十  
三